

vol.1

棋友会から

囲碁との出会いと楽しみ

棋友会代表幹事 水津 正臣 (25 期)

昨年、東京弁護士会から囲碁（棋友会）と将棋の友好団体が公認を受けました。弁護士会が文化面でもかかわりを持つという画期的な出発となりました。LIBRAの誌面にも、これからその種の記事が多くなることを期待して、その第一歩として私のつたない文章を掲載してもらうことになりました。

全く個人的な内容なので恥ずかしいのですが、会員の皆様方の中から少しでも囲碁に興味をもってもらえればと思い、私の囲碁との出会いと楽しみを記させて頂きました。

私が石を握ったのは、小学校1、2年生時、親から離れ、祖父母に育てられていたときでした。その祖父が囲碁を嗜んでいたようで、碁石を握られ、黒石をつなげるように打っていったら、褒められたことを覚えています。褒められたので、囲碁はいいものだという記憶は残りました。

その後、石を握ったのは、司法試験を受験中に、現在一弁で活躍している米林和吉先生に教えてもらい始めてからです。最初、何目置いたか覚えていませんが、米林先生は優しくないし、負かされてばかりでしたので、打つのは好きではありませんでした。ただ、今では多分、私の方が強いのではないかと自負しています。

何より、囲碁を勉強するようになったのは、金沢で一番強いと言われた玉田先生の事務所で弁護修習をしてからです。玉田先生は、修習は起案より趣味を育てることが大切だと、毎日碁を教えて下さいました。お陰で、金沢弁護士会の碁打ちの仲間入りができて少し力が伸びました。

習い事は、始めは褒めてもらい、途中少しけなされ

て反発していくというのがいいのかなと思います。

金沢から、昭和53年東京に戻り、知り合いがほとんどいないのと、仕事も少なくなり夜が暇になったので、日本棋院の教室に通うようになりました。3段までの免状はそこでもらいました。東弁棋友会に入れていただいたのは、昭和56年頃だと記憶します。棋力をみる為にと言われ、高橋崇雄先生に打ってもらい3段か4段と言われた記憶です。

旧会館の頃は、会館に行けば誰かがいたし、新会館に移ってからも、先輩の先生が席亭のように居て下さったので、囲碁室をのぞくのが楽しみでした。しかし、熱中する時間的余裕がないので、上達はしません。でも今回、弁護士会の公認団体の代表になったので、恥ずかしい思いをしないようにと少しは時間をつくっています。

修習同期の大西幸男君と五分位になりたいと思っていますが、最近の大西君はますます強くなっていて、とても追いつけそうにありません。負ければ強くなれるとの思いで頑張っていますが、なんといっても囲碁を打っているときが一番楽しいひとときです。

棋友会では、初心者向けの囲碁教室もやっていますので、初心者の方も多くなりました。多くの会員が棋友会に入ってもらえれば楽しさも倍増するので、是非、囲碁室に足を運んで下さい。